

－ 資 料 －

教養科目「日本の生活文化」受講生の 生活文化に対する意識と現状

細見 和子 西川 貴子

Students' Awareness and Their Status Quo about Cultures Related to Their
Life in Liberal Arts Class, "Cultural Studies in Japanese Life"

Kazuko HOSOMI Takako NISHIKAWA

要 旨

教養科目である「日本の生活文化」の受講生の意識と現状を知るため、受講理由や授業内容の理解度、家庭での行事や行事食などの生活文化に対する取り組みについてアンケート調査を行った。その結果、「授業内容の理解度」は項目により差はあったが、全項目の平均点は3点以上（5点満点）で、概ね理解できていると思われた。また、「この授業は役に立ったか」の回答では80%以上が役に立ったと答えていたので、この授業の学習効果はあったと言える。しかし、授業内容によって理解度が異なるので、さらに検討し、学生の理解度がより向上するような授業にしていきたいと考えている。また、日常生活の中での日本の生活文化の伝承は薄らいでいることがアンケート結果より推察された。今後も著者らは、若い世代に授業を通して日本の生活文化への意識を向上させ、伝承していきたいと考える。

キーワード：日本の生活文化・短期大学生・意識

1. 緒言

2013年12月に、「和食；日本人の伝統的な食文化」がユネスコ無形文化遺産に登録され、日本の食文化は世界から注目をあびている。数年前から「日本食ブーム」と言われ、海外での日本食レストラン店舗数は2006年の約24,000店から2013年には約55,000店と増加している（農林水産省¹⁾。また、中国、香港、台湾、韓国、米国、フランス、イタリアの7か国で好きな外国料理を聞いた調査（JETRO²⁾）では、日本料理が83.8%と最も多く、次は中国料理65.0%、イタリア料理59.5%の順で、かなりの差をつけて日本料理がトップであった。

このような現状の中、日本国内の様子を見ると、どちらかといえば欧米嗜好が根強いと考えられる。3歳から12歳の子どもの持つ母親1500人に、子どもが朝食で食べたいものを聞いた調査（バンダイ株式会社³⁾）では、ごはんよりパンの方が多いという食の洋風化がすすんでいる結果であった。

著者らは「日本の生活文化」という教養科目を担当し、若い世代に少しでも日本の食文化を

はじめとする生活文化や伝統文化を伝えたいという思いで授業を続けている。そこで、学生の日本の生活文化に対する意識や現状を把握し、授業内容について自己点検を行いたいと考え、アンケート調査を実施したので報告する。

2. 日本の生活文化の授業目的および調査方法

(1) 「日本の生活文化」授業の目的

教養科目として、後期に開講されている「日本の生活文化」の授業目的は、日常生活の中に伝承されている日本の独自の文化や習慣などの生活文化について学び、日常生活に役立てることである。それは古くからの慣わしである節句などの年中行事、人生の節目節目の冠婚葬祭などの行事、人との付き合いの上での常識やマナー、また、日本の食文化や着物の文化などである。これらの生活文化は、長い歴史の中で育まれ発展したものであるが、今日、私たちの生活様式は洋風化・多様化され、また、核家族化が進み、その伝承が薄らぎ、簡略化されるようになりつつある。伝統的な日本の生活文化には、日本人の深い思いやりの心が宿り、これらの生活文化を知ることは、日本の心を知ることに繋がると考える。日本の生活文化を学び、美しい季節の移り変わりの中にある「和の心」を見直し、日常生活に役立ててほしいという思いで授業を行っている。

(2) 調査対象および内容

平成25年度後期の「日本の生活文化」受講生70人に対して、平成26年2月、授業終了後にアンケート調査を実施した。内容は、受講動機や受講後の感想、授業内容の理解度、家庭で行っている行事や行事食、着物に対する意識等である。

尚、アンケート内容については、本学ヒト研究倫理委員会にて承認を得ている。

3. 結果

(1) 受講の動機について

受講の動機については、①単位をとるため②日本の生活文化に興味があった③学びたいと思った④面白そうな科目だと思った⑤なんとなく⑥空き時間だったの6項目で、複数回答とした。

その結果、「単位をとるため」とのみ答えた学生は21人(30%)で、それ以外の49人(70%)は、複数項目を回答した。その内訳は、「興味があったから」(35%)、「学びたかったから」(33%)、「面白そうと思ったから」(27%)、「なんとなく」(18%)、「空き時間だったから」(10%)であった。

(2) 受講した感想の動機別比較について

受講した感想では、この授業が役に立ったかどうかについて質問をしたが、「役に立った」

58人（83%）、「どちらともいえない」12人（17%）、「役に立たなかった」は0であった。

この受講後の感想を、上記（1）受講の動機が、単位をとるためのみの者と、興味あり・学びたいの者を比較して示したのが図1である。学びたい・興味ありの者の方が、単位を取るためのみの者より、役に立たと答えた割合が高かった。

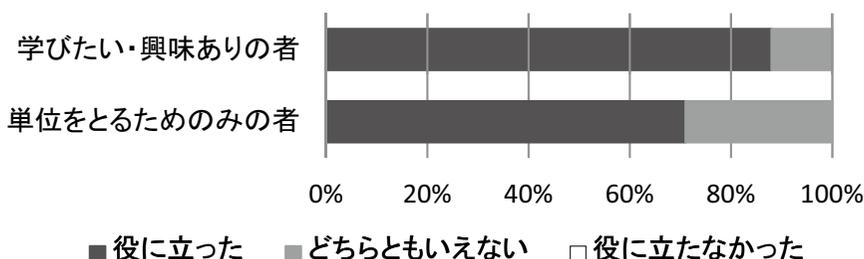


図1 受講した感想の動機別比較

（3）授業内容12項目の理解度について

授業の理解度を見るため、授業の内容を12項目に分けて、受講前を1点とした場合、2点：あまり理解できなかったと思う、3点：まあまあ理解できたと思う、4点：かなり理解できたと思う、5点：よく理解できたと思う、の5点満点で自己評価をさせた。12項目は次のとおりである。

- ① 日本の年中行事について理解できた。
- ② 人生のお祝い事について理解できた。
- ③ 結婚式の招待状の返事の書き方，スピーチで使ってはいけない言葉，お祝い袋の書き方など慶事のマナーについて理解できた。
- ④ 数珠の持ち方，焼香の仕方，宗教によって異なるお供え袋の書き方など，弔事のマナーについて理解できた。
- ⑤ 敬語の使い方の基本について理解できた。
- ⑥ 手紙の書き方の基本，お辞儀の仕方の基本，物の渡し方の基本について理解できた。
- ⑦ きものの部分の名称や素材，文様について理解できた。
- ⑧ 日本料理の特徴が理解できた。
- ⑨ お箸の使い方やタブーが理解できた。
- ⑩ 食生活のマナーについて理解できた。
- ⑪ 和菓子の歴史（いわれ）について理解できた。
- ⑫ 日本には独自の生活文化があることが理解できた。

授業内容12項目の理解度について、受講生全体の平均点と動機別の平均点を表1に示す。12項目全ての平均点は3点以上で、「まあまあ理解できた、かなり理解できた」が大半を占める

表1 授業内容12項目の理解度の平均点

授業内容 12項目	全平均	単位を取るためのみの者	興味あり・学びたい者
① 日本の年中行事について理解できた	3.3	3.3	3.3
② 人生のお祝い事について理解できた	3.3	3.1	3.3
③ 結婚式の招待状の返事の手書き方、スピーチで使ってはいけない言葉、お祝い袋の手書き方など慶事のマナーについて理解できた	3.2	3.1	3.2
④ 数珠の持ち方、焼香の仕方、宗教によって異なるお供え袋の手書き方など、弔事のマナーについて理解できた	3.1	3.0	3.2
⑤ 敬語の使い方の基本について理解できた。	3.4	3.4	3.4
⑥ 手紙の手書き方の基本、お辞儀の仕方の基本、物の渡し方の基本について理解できた	3.3	3.2	3.3
⑦ きものの部分の名称や素材、文様について理解できた	3.1	3.0	3.1
⑧ 日本料理の特徴が理解できた	3.4	3.3	3.4
⑨ お箸の使い方やタブーが理解できた	3.6	3.5	3.7
⑩ 食生活のマナーについて理解できた	3.5	3.3	3.6
⑪ 和菓子の歴史（いわれ）について理解できた	3.3	3.3	3.2
⑫ 日本には独自の生活文化があることが理解できた	3.6	3.3	3.7

結果であった。項目により平均点に差があり、最も高いのは3.6点で、最も低いのは3.1点であった。平均点の高い項目は「⑨お箸の使い方やタブーが理解できた」と「⑫日本には独自の生活文化があることが理解できた」であり、低い項目は「④弔事のマナーについて理解できた」と「⑦きものの部分の名称や素材、文様について理解できた」であった。

また、受講動機別では、興味あり・学びたい者の方が、単位を取るためのみと答えた者より、ほとんどの項目で理解度の平均点は高い傾向にあった。

平均点の高かった2項目と低かった2項目について、評価点の割合を比較して表したのが、図2である。4点（かなり理解できたと思う）と5点（よく理解できたと思う）と答えた受講生の割合は、平均点が高い項目は約45%であるのに対して、平均点が低い項目は約20%とかなり差があった。また、2点（あまり理解できなかった）の割合は、平均点が高い項目は5%前後に対して、平均点が低い項目は14~19%あった。

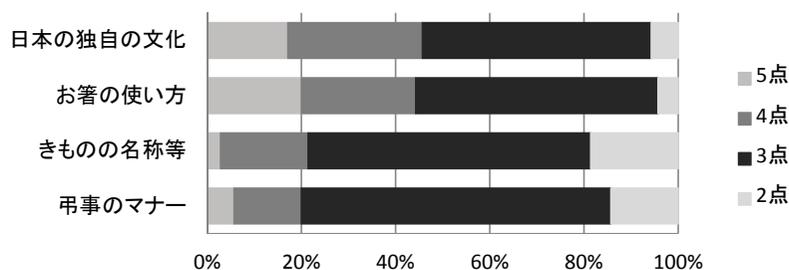


図2 平均点が高い2項目と低い2項目の評価点の割合

(4) 日本の生活文化を学んだ時期および相手について

日本の生活文化を学んだ時期については、複数回答であるが、36%は短大でこの授業を受けてからと答えていた。次いで、小学校（19%）、高校（13%）中学校（9%）の順であった。

また、家族の中で日本の生活文化を学ぶ相手については、複数回答であるが、母が50%、祖母が36%、父（16%）、祖父（10%）の順であった。

(5) 家庭で行っている行事や行事食について

学生が家庭で行っていると思われる行事や行事食を列記し、複数回答の結果を図3、図4に示す。行事については、バレンタインとクリスマスが1位で91%の受講生が実施していると回答し、2位がお正月（80%）、3位が初詣（73%）、4位が母の日（69%）、5位が父の日（67%）で、その他50%以上実施しているものは、ホワイトデー、節分、ひな祭り、お彼岸の墓参りであった。

また、家庭で食べている行事食は、1位が年越しそば（94%）、2位が雑煮（89%）、3位が節分のまき寿司（74%）、次いで、おせち料理の黒豆（67%）、おせち料理のかずのこ（54%）でそれ以外は50%以下であった。

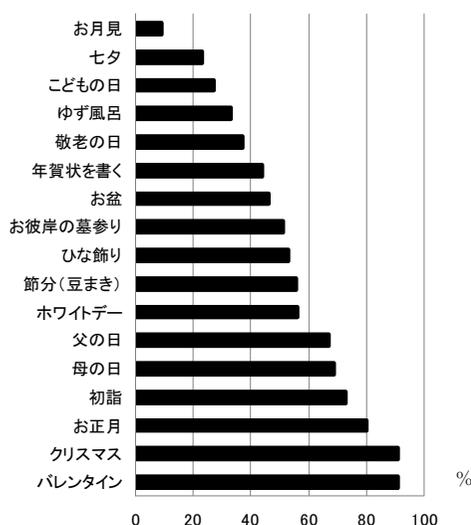


図3 行事の実施状況

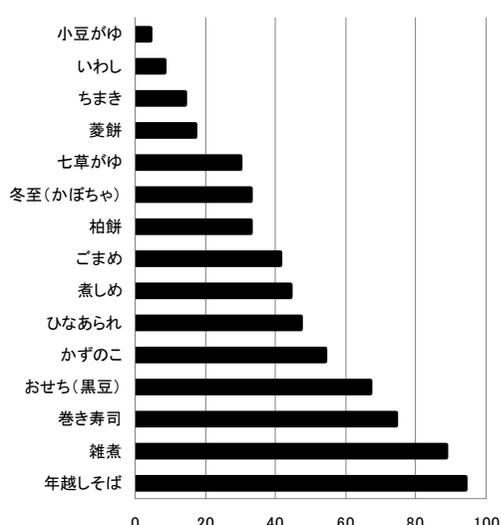


図4 行事食の実施状況

(6) きものを着た経験について

受講生が今までにきものを着た経験について聞いた結果では、子どもころの七五三（91%）と夏のゆかた（79%）の2回程程度で、お正月の初詣やお稽古ごとなどはほとんどなかった。

(7) 将来きものを着ようと思うかについて

将来きものを着ようと思うかどうかという質問については、84%が着たいと答えた。その理由については図5に示すように、「日本人だから」(58%)、「きものが好きだから」(44%)、「伝統を大切にしたいから」(34%)であった。

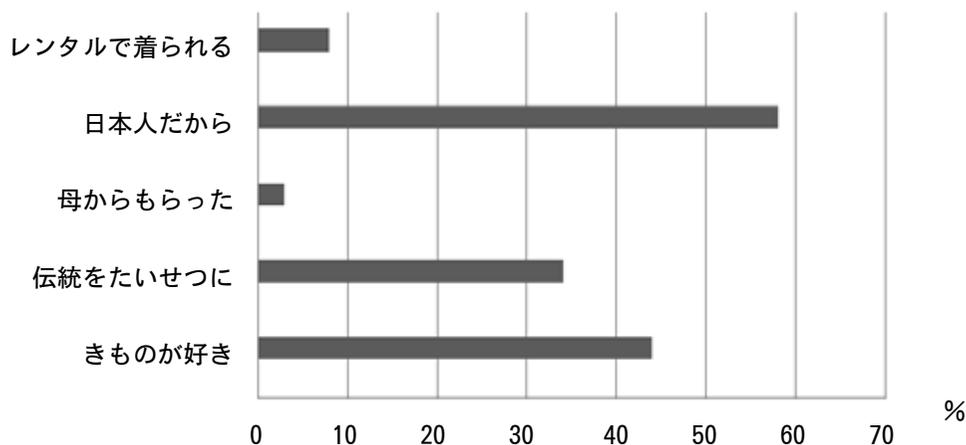


図5 将来きものを着たい理由

4. 考察

「日本の生活文化」の授業内容を12項目に分けて検討したが、全ての項目の平均点は3点以上で、学生たちの理解度は概ね良好であったと言える。しかし項目により平均点に差が有り、あまり理解できなかったとの回答が15%前後ある項目もあり、今後の検討課題である。理解度が良好であった授業では、視覚、聴覚に訴え、手を使うなどの動作を加えたことや外国文化との比較を通して日本独自の文化を考える機会にしたことなど、学生がより身近に感じやすくなるための工夫がよかったのではないかと考える。また、理解度の低かった内容については、未経験であるため理解しにくかった部分があったのではないかと推察する。今後、わかりやすい授業になるように工夫を重ねたいと思う。

受講した感想については、役に立ったと答えた回答が83%であった。受講動機別では、単位を取るためのみと答えた者より、興味があり・学びたいと思った者の方が、役に立った割合が高いという結果から、選択科目であるが、意識の高い受講生の方が学ぶ意欲があり、理解度も高かったと推察できる。

「日本の生活文化」を学んだ時期については、36%は短大のこの授業を受けてからと答えていたことは、受験時期を迎える学業期には、生活文化を学ぶことが少なく、短期大学において開講することは、効果的であると考えられる。また、家族の中で日本の生活文化を学ぶ相手については、母が50%、祖母が36%であり、家庭の中での女性、特に母親の影響は大きいと推察

される。将来母親になる女子学生へ日本の生活文化を伝えることの重要性を感じた。

家庭で行っている行事については、バレンタインとクリスマスが最も多く（91%）、お正月（80%）を上回っていた。これらは、外国の行事が日本において定着し、日本の行事のひとつになっている代表であるが、日本の伝統的な生活文化の継承が薄らいでいる現状がここにも現れていると感じた。しかし、お正月も受講生の80%の家庭で実施されていることは喜ばしいことであり、また、母の日（69%）や父の日（67%）も70%近くが実施している現状は、本学の受講生の家庭の健在さが窺える。家族揃っての行事は、家族団らんとなり、そこには家族の心の触れ合いが生まれ、子どもの成長にとってよい影響を与えるため、日本本来の行事でなくても家族揃って行うことの意義はある。行事の中で最も実施状況が低かったのがお月見である。お月見は日本の伝統的な年中行事の一つで自然の美しさを愛でるとい日本人の心のこもった行事であるが、実施率は非常に低いという結果で残念である。行事についても若い世代が身近に感じて学べるような工夫をし、日本の伝統を出来るだけ多く伝えていきたいと思う。

また、家庭で食べている行事食は、年越しそば（94%）、雑煮（89%）、節分のまき寿司（74%）、おせち料理の黒豆（67%）、おせち料理のかずのこ（54%）の割合が高く、お正月に関するものが多い傾向であった。このことは、1年の始まりはお正月からという日本人のお正月に対する意識が、食の分野において伝承されているではなかと推察する。

日本の伝統衣装であるきものについては、着た経験は幼少時の七五三であったり、簡単に着ることのできる夏の浴衣であったりときものと日常生活の結びつきが少ないようである。それは、20歳以下の学生であるため、本格的にきものを着る機会に出会えていないのではないかと考えられる。しかし、将来、きものを着たいと84%の回答があったことは、伝統を継続していく観点から、喜ばしいことである。その理由として「日本人だから」「きものを着たいから」「伝統を大切にしたいから」という項目があげられていたことは、今後に期待できるのではないかとと思われる。

5. おわりに

日本の生活文化の授業の理解度や日本の伝統に関する受講生の状況を考察して、著者らの授業の重要性を改めて認識できた。単位をとることが動機であった受講生も、受講後は役に立ったと回答し、役に立たなかったと回答した受講生は皆無であった。今後は少しずつ改善・工夫をしながら、受講生にわかりやすい授業をめざし日本の伝統に対する意識の向上を図り、同時に母親予備軍である女子学生に日本の生活文化を伝承していきたいと考える。

参考文献

- 1) 海外における「日本食レストラン」店舗数の推移，農林水産省，食生活データ総合統計年報2014年版，334，三冬社

- 2) 外国人が好きな外国料理, JETRO, 食生活データ総合統計年報2014年版, 334, 三冬社
- 3) 子どもが食べたい朝食メニュー, バンダイ株式会社, 食育・食生活総合データ年報2013, 120-121,
(株)日本能率協会総合研究所